

398

 ^{123}I -IMP Brain SPECT と C^{15}O_2 持続吸入

法による PET 局所脳血流イメージングの比較

吉川京燦¹, 宇野公一¹, 間宮敏雄¹, 湯山琢夫¹, 板橋孝¹, 今関恵子¹, 尾形 均¹, 古賀雅久¹, 蓑島 聡¹, 清水わか子¹, 三枝健二¹, 有水 昇¹, 岡田淳一², 伊藤裕², 佐藤和一², 植松貞夫², 山浦 晶³, (千葉大学医学部放射線科¹, 同放射線部², 同脳外科³)

1980年 Winchell らによって開発された N-isopropyl-P-[^{123}I]iodoamphetamin(^{123}I -IMP) は、脳血流イメージング剤として臨床に応用され、その有用性について広く検討がなされており、 ^{123}I -IMP による脳血流の定量化も着々と研究されている。一方、高精度の局所脳血流の測定法としてポジトロンCT(PET)による C^{15}O_2 持続吸入法が知られており、脳血管障害等の脳疾患の解析に有力な手段となっている。今回我々は脳血管障害を中心とした脳疾患患者に ^{123}I -IMP を投与し Brain SPECT を施行し脳血流イメージの解析を行なった。また、ほぼ同時期に同一症例に対し PET にて C^{15}O_2 持続吸入法による局所脳血流(rCBF)測定を施行し、両検査を比較してその相関性、有用性について考察したので報告する。